



高橋 宏明

社団法人東北経済連合会 会長

近未来を考えること

20世紀を迎えた1901年（明治34年）正月の新聞は、「二十世紀の預言」というタイトルで100年後の未来を予測している。葉巻型の機関車が東京－神戸間を2時間半で結ぶ、など23項目にわたる内容である。

その一つに「自動車の世」があり、「馬車は廃せられ、之に代ふるに自動車は廉価に購ふことを得べく、また軍用にも自転車及び自動車を以て馬に代ふることとなるべし。従て馬なるものは僅かに好奇者によりて飼養せらるゝに至るべし」とある。そして現在、わが国の自動車保有台数は7900万台を越える。この他、現在のテレビ電話を予測する「写真電話」、エアコンを予測する「暑寒知らず」なども言い当てており、明治人の想像力には驚かされる。

上記の預言掲載の翌年、1902年（明治35年）、日本の自動車販売業者がアメリカから自動車のエンジン2台を持ち帰り車体を組み立てた。これが、わが国における自動車製造の幕開けと言われる。その後、日本車は世界中を駆け巡るようになり、自動車産業はわが国の産業経済を牽引することになる。そしていま、東北は自動車の一大生産拠点へと変貌しつつある。地域に活力を与えるものとして大いに期待している。

東経連でも、自動車産業の集積に向けた具体的取り組みとして、東北と新潟の企業や大学が持つ新技術・新工法や製品を、完成車メーカーなどに紹介する活動として「東北地域の車を考える会」を昨年8月にスタートさせた。東北の部品メーカーと完成車メーカーとが、一緒に次世代の自動車を開発できるチャンスにしたい。

クルマが馬車に取って代わり、いまとなっては自動車が存在しない世の中など、とても考えられない。より速く、より安全に、より快適に、そしてより環境にやさしく、自動車への期待は高まるばかりである。自動車産業はそうした人々の願いを、技術の向上でかなえてきた。そして現在では、道路情報を収集しながら自動運転するシステム（ITS）まで想定し研究開発が進められているという。将来的には、眠っていても目的地に到着できる時代が来るかもしれない。

100年後の未来を予測することはなかなか容易ではないが、近未来の夢を描きながら、その夢を実現できるよう東北の技術を高めていきたい。そのことが、東北を自動車産業の拠点として大きく花開かせ、それを定着させることになるだろう。2011年を、東北がクルマの未来をリードする門出の年としていきたい。

（東北電力株式会社 取締役会長・たかはし ひろあき）